Historia

明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｈｉｓｔｏｒｉａ

【Ｎコード】
Ｎ０７４４Ｑ

【作者名】
明

【あらすじ】
瀬川小春は超人だ。歩くチートだ
頭は良く、運動神経は素晴らしい。性格にちょっと難があるが、それを上回る可愛らしい外見を持っている。
そしてそんな小春の兄の俺――瀬川智晴は一言で言うと、凡人。凡凡凡凡人だ。おまけに小春とは一つ違いだが同じ学年。比較されるのはいつものこと。奴は俺より優れている、高一になるといい加減そのことにも慣れる。
しかし。

小春と一緒に召されてしまった異世界では、何故か俺が勇者に選ばれてしまった。何故だ。
第一発見者はＬｖ．８９くらいの凄腕少年。
そいつをいれて三人で魔王を倒しにいく、そんな話。何処の無茶ぶりだ。
というかもう小春と少年だけでいけよ。勇者が一番弱いとか、もう俺のアイデンティティー無くね？

Prologue A　最弱勇者の独白

何をやらせても瀬川小春は俺の上を行く結果を出す。

テストの点数のような勉強面から短距離走、長距離走の記録といった運動面まで、小春は全て俺を上回るのだ。一応言っておくが、俺は馬鹿ではないし、運動音痴でもない。あえて言うなら俺は生粋の凡人であり、全てのステータスがスタンダードなのだ。ただ小春が規格外なだけである。

そしてそれを顕すように、奴は外見までいい。性格は悪いわけではないが、ちょっと難がある。しかしそれを上回る才能と美貌があるのだ。十二分に歩くチートの資格を有している。

俺はそんな小春に誰よりも近い距離で育ったものだから当然事あるごとに比較された。結果は言うまでもなく、両親、親戚一同、先生先方といった審査員の軍配は全て小春に上がった。皆が皆して口々に小春を褒め、そして思い出したように俺を見る、苦笑。

そんな扱いだったものだから当然俺はぐれた。ぐれにぐれた。大きな声では言えない話だが、煙草も吸ったし、酒も少しだけ飲んでみた。不味かった。法を犯したという快感もスリルも特にわかなかった。

おそらく俺はそんな快感やスリルが欲したかったわけではなく、ただ、注目して欲しかったのだ。自分に。例えそれが叱責であろうと俺は喜んで受けていたことだろう。

詰まるところ、俺はただ小春に向けられるその視線や言葉の一欠片でもいいから欲しかったのだ。

間違った方法だということはわかっていたが、努力という正攻法が小春には通じないことを、当時の俺は痛いほど理解していた。小春の数多の才能の内に？努力をする？というものもあって、あいつはいつだって努力を惜しまなかった。

俺が一歩進む間に、奴は俺の十歩を一息に駆けていた。

つまり、俺は小春にあらゆることで負けていたのだ。努力にしろ、才能にしろ。

その現実に絶望して俺は非行に走ったわけなのだけれど――当時の事はあまり良い記憶として俺の頭に残っていない。

悉く打ちのめされたことによって生じた絶望、馬鹿なことをしているという自覚から来る自己嫌悪、そしてそれらを振り払おうとますます暴力に明け暮れ、さらに深みに囚われていく――正に人生のどん底の時代である。と言っても俺はたかだか十数年しか生きていないが。

そんな暗黒時代もある事件を経て過ぎ去り、俺は今はまあ、あの頃からは想像もつかないほど真っ当に毎日を過ごしている。少なくとも最近、母さんは泣かないし、父さんも怒鳴らない。

小春との仲も修復した――といってもそれは俺の話だけで、あの暗黒時代中も小春はほぼ何ら変わらない態度で俺に接していた。全くとんでもない人間である。

そんな感じで今の俺の生活は回っている。毎日が平穏で全く喜ばしいことである。

予想の範疇の中だけの話なのだが――俺はおそらくもう、ぐれたりしないのだろう。

何故なら俺は見つけてしまったのだ。誰よりも小春に近いために理解したくなかったそのことを。

何をやらせても瀬川小春は――妹は俺の上を行く結果を出す。

それが俺の人生の前提であるべきだったのだ。そうすれば俺はぐれ

たりはしなかったのだろう。小春は俺より優れている、そのことを前提として認めてしまえば、俺はきっと評価の差に嘆いたりしなかったのだろう。その事を当然として認めていたはずだ。
しかし――妹でありながら同じ学年、という奇異な状況なため、俺はそれを見つけることに大分時間をかけてしまった。しかしついに俺はそれを見つけ、そして今、受け入れようとしている。

いや、このことがなければ受け入れていたのだろう。

そう、このイレギュラーがなければ。

「リズベットの花の紋様……まさか、まさか……。
しかし、それが何よりの証拠。

アークレイリへようこそ、勇者殿」

俺や小春とそう変わらない年頃の少年にそうあっさりとした口調で言われ、俺たち――俺と小春はまじまじとお互いの顔を見ることになる。間抜け面の小春の大きな黒い瞳にはやはり間抜け面をした俺が映っていた。

まさにイレギュラーだった。
改めて、もう一度記そう。

何をやらせても瀬川小春は俺の――瀬川智晴の上を行く結果を出す。

しかし、まことに可笑しなことに、世界は俺を選んだのだ。

まさに完璧を具現化したような小春ではなく、世界は何の取り柄もない平凡な俺を勇者に選んだ。

それが果たしてどういう結末をもたらすことになるかは、今の俺には知るよしもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0744q/

Historia

2011年1月16日06時25分発行